

ジョン・バーニングの魅力 3

『バラライカねずみのトラブロフ』と

『たいほうだまシンプ』を中心として

高原 典子

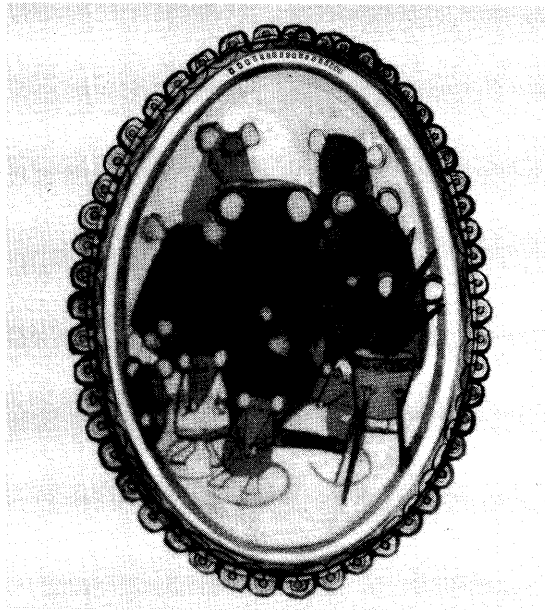


○ 不分明な主人公

『バラライカねずみのトラブロフ』の第一ページは、ねずみのトラブ一家の肖像画(図版①)とともに始まります。ここには九匹の大家族が描かれていますが、不思議なことに主人公のトラブロフがどのねずみなのかは「はつきりしません。文の方も「このなかに、トラブロフがいます」と読者の想像に任せる形となっています。私はたぶん前列の中央、または左端のねずみがトラブロフだろうと思いますが、後のページを繰って第一場面の主人公を推理するのはなかなか楽しいことであると同時に、主人公がそれらしい特徴を持っていないことに、心なしか不安が残ってしまいます。でも、それだからこそ主人公は、やがて家族から離れて旅に出なければならなくなるのでしょう。あるいは作者の内にはどの子ねず

◀ 図版① 『バラライカねずみのトラブروف』

(ほるぷ出版)より



みも「トラブروف」の可能性を持っているのだという思いがあるのかもしれませんが。いずれにしても、バーニングは、読み手のペースに合わせて主人公捜しのできる

「絵本」という媒体の特色を心にくいほど知っていて、読者に楽しいなぞかけをしたような気がします。

○夢中になること

トラブروفはヨーロッパのなかほどにある宿屋で生まれ、酒場の台のはめ板の後ろに住んでいました。そこには夜ごと、ジプシーの楽士たちがやって来て演奏し、生活の糧を得ていましたが、彼はそのバラライカの音色に魅せられてしまうのです。寢床に帰るのも忘れて音楽に聞きほれるほどです。

すると事情を知った大工のじいさんねずみがバラライカを作ってくれることになりました。それができ上がるまで待つ時間の長いことといったら！ 国一番のバラライカの名手になって、聴衆からわれんばかりの拍手を浴びる夢を見たほどです。希望や将来の夢のような観念的なものを絵本で表現するのは、なかなかむずかしいことですが、この作品では、トラブروفがどれほどバラライカに夢中になったかが、場面を追ってたたみかけるよう

に視覚化されていますので、幼い読者にもよく伝わると
思います。

さて、念願のバラライカを手に入れるまでは周囲の力
添えがありました。その先はトラブروف自身の問題に
なります。そして彼の決意のほどを問われる機会は、ま
もなくやってきます。バラライカの師となるジプシーの
楽士たちが旅立つことになったのです。それを知ったト
ラブروفは、両親の反対をおそれ、だれにも告げずにジ
プシーのそりにこっそり乗りこんで出かけます。

何かに夢中になるということは、その対象にのめりこ
んでまわりが見えなくなる状態ですが、家庭の中で工作
などに夢中になるとちがって、家を離れてまで何かを
追いかけていくとなると、まず家族のもとから離れられ
る段階に達しているということになります。

これは、アーディゾーニの「チムとゆうかんなせん
ちようさん」のチムの旅立ちなどにも言えるでしょう。

海岸の家に住むチムは、船乗りになりたくてたまりま
せんでしたが、両親からおとなになるまで待つように言

われ、がっかりしていました。ところが、ある日、汽船
を見にいく機会がおとずれたのをいいことに、密航をは
かるのです。

こうして船に、バラライカにと夢中になった主人公た
ちは、家を遠く離れ、旅の生活に入ることになります。

○さすらい

ところで、これらの旅は、ただ楽器の技術をマスター



▶ 図版② 『バラライカねずみのトラブروف』より

したり、船乗りとしての経験を積むというだけの意味を持っていてのではありません。心理的な発達レベルから捉えれば、自分らしさを確立する自己確立と、自己実現のプロセスともいえます。

人は生まれたときから、その人なりの独自性を持っています。それが最初からきわだっていたとは限りません。肖像画の中のトラブロフのように、主人公とはわからないほどまわりと融合してしまっ、またアイデンティファイされていない場合もあります。自己確立されて初めて、バラライカを持つたり、(図版②) スキーをはずねずみとして個性的に描かれるようになるのです。

そのプロセスでは、トラブロフもチムも家族からひとり離れています。そばには頼りになる旅人としてのジプシーの楽士や、勇かな船長がいます。どうやら、家族に代わる家族以外の良き同伴者が、非常に大きな役割を果たしているといえそうです。憧れや理想のモデルを得ることが、自己確立を促すわけです。その原動力となるのはやはり「夢中になること」でしょう。



▲ 図版③ 『バラライカねずみのトラブロフ』より

親の立場を考えると、いくら何かに夢中になったからとはいえ、ある日突然、子どもがいなくなれば、トラブロフやチムの両親のように子どもの身を案じ、病気になるほど悲嘆にくれるのも当然のような気がします。でも、子どもの内面では、決して突然ではなく、着実に、自己確立への準備がなされていることが、彼らを見てみるとよくわかります。

さて、旅立ったトラブロフと毎日を共にするジブシーたちの生活は、宿屋から宿屋へとまわり歩き、歌い、踊り、納屋で寝とまりするというものでした。その表情は、いつも目を閉じ、流浪の民としての運命を甘受する深い憂愁にいろどられています。(図版③)そして彼らの旅は果てしなく続くのです。こうした、旅をすみかとするジブシーや船乗りの「さすらい」が、自己確立の風景として象徴的に描かれています。

○もっつひつひのさすらい

バーニングガムの作品には、別の意味でさすらい主人公

もいます。かつては捨てた犬だった彼の愛犬アクトンを主人公にした『たいほうだまシンブ』です。だれが見てもみっともない小犬のシンブは、飼主にやむなくゴミ捨て場のそばに捨てられています。ねずみに邪魔にされ、どらねこに追いかけられた拳句、野犬がりの車に放り込まれます。でも、他の犬と違って迎えに来てくれる飼主のいないシンブは、生命の危険を感じて逃げだし、さまよい歩いた末、サーカスのほろ馬車に近づくのです。そこには親切なピエロがいて、空腹のシンブにたっぷり食べものをくれ、ぐっすり眠らせてくれました。

ところが、このピエロも、おもしろい出しものが創りだせなかったら、サーカスを追われるという窮地に陥っていました。そこでシンブは知恵をしぼり、自分が大砲の玉となってピエロの持つわかを破るといふ芸を考え出し、ピエロを救います。こうして、二人はサーカスの花形となり、シンブはピエロと一緒に旅してしあわせに暮らすのです。

二人の芸が拍手を受ける場面は輝かしく、諦観的なジ

◀ 図版④ 『たいほうだまシンブ』

(ほるぷ出版) より



プシーの表情と好対照をなしています。(図版④) 協力の成果が得られたことだけでなく、家族ともいえる親友に出会えたことが、彼らをこんなにも喜ばせているのです。家族のないシンブにとって、「さすらい」とは家族を見つけるプロセスだったともいえます。これからサーカスの旅は続きますが、二人の絆は何にもまさるも

のとなるでしょう。

最後の場面では、『ガンピーさんのふなあそび』にも登場した「このうえもなく安定した緑色」の夜が、サーカス列車をすっぽりと包みこみ、しあわせそうなシンブとピエロを印象づけています。

○トラブロフの帰宅

さて、旅を続けていたトラブロフにも、やがて帰郷する日が訪れます。おかあさんの病気が重いからと妹が迎えに来たからです。二人は雪の中を野宿しながら、何日もかかって帰りますが、このときの耐えがたいほどの寒さは、黙って家を出たトラブロフを心配する親の心境にひとしいものでしょう。

彼の無事な姿を見て、両親はもちろん喜びます。そして今度は、そのバラライカの演奏によって、家を追われそうだった家族が救われるのです。グリムの昔話『ヘンゼルとグレーテル』では、二人が魔女の家から持ち帰った宝物によって、父子三人がしあわせになります。ト

ラブ一家の場合も、トラブプロフの自己確立がその宝物に
ひとしい意味を持つわけなのです。

トラブプロフにとっても、「さすらい」は、自己確立だ
けでなく、新たに家族の意味を見いだす機会となったと
いえるでしょう。



子ども、そして人間の成長には象徴としての「旅」が
欠かせません。バーニングムはこの二冊で、ねずみ、捨
て犬など社会の底辺に生きる主人公とジプシーやピエロ
という旅芸人を出会わせ、「さすらい」の光と影を描き
出しました。そこでは、常に新しい自己を見つけて磨
き、それを生活の糧としなければ生きていけないせっぱ
つまった状況が展開されます。その緊迫を分け合う仲間
だからこそ、そこから生まれる人と人、家族との絆には
類まれな強さと深みがあるのでしょう。

これら二冊は、彼の作品の中でも長編といえるもので
すが、そのまなざしの鋭さと温かさ、表現力の自在さ
が、隅々にまで感じられます。

○おわりに

絵本を読み聞かせてもらうことは、いくつになっても
楽しいことに違いありません。秘書を志すコースの学生
たちに絵本の授業を持ったとき、「絵本を読んでもらっ
て楽しかった。私は保母さんや幼稚園の先生になるわけ
ではないが、もし自分の子どもが生まれたら、是非、読
んであげたいと思う」という感想を頂き、絵本の魅力を
再確認しました。それだけでなく、子どもに読んであげ
たい、感動を分かち合いたいというみずみずしい感受性
もだいじなものと思いました。

絵本の場合、文章の長さからいうと比較的読み聞かせ
しやすく、聞き手にとっても、読み聞かせてもらって初
めてわかる面白さがあります。それに、何ととっても読
者を特定しない良さが、ジム・トレリスをして「絵本
は小学生から高校までのすべてのクラスの読み聞かせリ
ストに加えるべきである*」といわしめたた所以でしょ
う。彼は大人の講演会にも絵本を入れるといいます。私
も絵本を読むにつけ、絵本は子ども、そして今、子ども

のそばにいる方だけのものではなく、あらゆる方の、とりわけ、これから育児にかかわるかもしれないさまざまな方のものであってほしいと思います。

六回にわたって「絵本の世界」を読んでくださってありがとうございました。

これらの作品論を書くにあたって、清水いく子著「バージニア・リー・バートン論序論」(同人誌『舞々』2号所収)、瀬田貞二『絵本論』(福音館書店)、中村柱子『子どもの成長と絵本』(大和書房)、長谷川摂子『子どもたちと絵本』(福音館書店)、本田和子『子どもたちのいる宇宙』(三省堂選書)、松井るり子『ごたごた絵本箱』(学陽書房)、松岡享子『えほんのせかいこどものせかい』(日本エディタースクール出版部)、森下みさ子『安野光雅のA・B・C』(同人誌『舞々』3号所収)、吉田新一『絵本の魅力』(日本エディタースクール出版部)、日本児童文学別冊『世界の絵本100選』、『日本の絵本100選』(偕成社)などから多くの示唆をいただきました。

掲出図書

○ジョン・バーニングサムさく／せていていじ訳

『バラライカねずみのトラブ・ロフ』(ほるぶ出版・絶版)

○ジョン・バーニングサムさく／おおかわひろこ訳

『たいほうだまシンブ』(ほるぶ出版)

○エドワード・アーディゾーニさく／瀬田貞二やく

『チムとゆうかなせんちょうさん』(福音館書店)

引用文献

*ジム・トレリリス著・亀井よし子訳

『読み聞かせ——このすばらしい世界』(高文研)

(小田原女子短期大学非常勤講師)

※「絵本の世界」は今月で終わります。高原先生、一年間、楽しい絵本論をありがとうございました。(編集部)